

寺島和美作 「成層圏のあなたに」

雅志の母 (オフ。電話で)ほんとに… いいわねえ。うちなんか、男ばっかでしょ。イヤーよ、女の子が欲しかったわあ。(間)そんなあ(笑い)

山田雅志 全くうるさいなあ。またお母さんの長電話。全くもう主婦っていうのは、テレビと電話がなかったらどうやって生きていくんだろう。あっと、もう 7 時になるんだ。今夜は流星群が見えるんだ。早くベランダに望遠鏡を出して…と。うるさい俗世間から離れて、満天の星の世界へと…。

ナレーション 山田雅志は青春高校 2 年生。お聴きのとおり、星を見るのが大好きで、夜になると、望遠鏡をのぞいては、遠い宇宙へ思いをはせるのでした。
その夜の夕食の時——。

(効果音) (食器の触れ合う音)

雅志 ほんで、長電話の相手はだれだったわけ？

母 うん。咲子おばちゃんよ。

雅志 聞くだけ無駄だと思うけど、何か用事があったわけ？

母 用事？ さあ、別に聞かなかったけど…。

雅志 やっぱり…。

母 それはそうと、まゆみちゃん、今年の夏から、ウインドサーフィンっていうの始めるんですって。今、何とかスポーツクラブに毎日練習に行ってるんですって。

雅志 へー。

ナレーション まゆみというのは、雅志のいところで、1 つ年下でした。

雅志 でもまゆみのやつ、次から次に遊びに手を出して、何考えてんだろ。

母 おまえだって同じじゃないの。頭の中から“星”の 2 の字を取ったら何が残るの？

雅志 うっ。…分かったよ。ごちそうさま。(モノローグ)全く、ルンルン気分のまゆみなんかと一緒にされちゃたまんないよ。でもあいつ、一応あれでもクリスチャンなんだよな。クリスチャンっていうと、なんか“芋姉ちゃん”っていうイメージなんだけどなあ。本当にイエス・キリストなんてのを信じてるんかね、この現代にさ。…あ、もうこんな時間だ。早くしないと流星群が見られなくなっちゃう。

(音楽) (宇宙の雰囲気)

雅志(モノローグ) しかし、星っていうのは不思議だよなあ。こうして望遠鏡で見れば、なんの変哲もない、ただボクボクした地面が広がっているだけなのに。肉眼で見た時は、輝いて、大きさや、色が微妙に違って見える。何よりも、暗やみの中で無数に輝く星は、きれいだ。この瞬間にも、あの宇宙のどこかで無数の小さな星が生まれ、また焼けて消えてゆく。不思議だよなあ。

ナレーション その時、雅志の心の中に、まるで何かに打たれたように、“神”という言葉が浮かんできたのです。あの成層圏のかなた、自分の全く知ることのできない世界で、無数の星が生まれ、また消えていく。…人間の知恵では計り知れない、宇宙の仕組み…。そんなことを考えると、動かしがたい大きな力、神の力がどこかに存在しているような気がしてきたのです。けれど反面、この科学の進んだ現代に…、とも考える雅志でした。

次の日、学校で――。

男子 おい雅志、今度の土曜の夕方、すい星が見えるんだってな。おれ、この間買った新しい望遠レンズで、天体写真撮って見るからさ。雅志も泊まりがけで手伝いに来てくれよ。

雅志 うーん。でも僕も自分の器械で見たいんだよね。

男子 チェ、冷てえなあ。

女子(優子) え、何 何 何を見に行くの？

男子 違うよ。すい星の天体写真を撮るっていう話。

女子 なーんだ、また星の話。

男子 「なーんだ」とはなんだよ。どうせ女には分かりっこないロマンの世界だよ。

女子 なんですって?!

雅志 まあまあ。あ、そうだ、小西を誘って見たらどうだ？ あいつ、割と物理とかに興味あるみたいだし。

男子 小西か…。

女子 ダメダメ、小西君なんて。小西君に興味があるのは、受験の物理だけ。星を見つけて感激、なんてのには興味示さないわよ。

男子 おれもそう思うよ。あいつに男のロマンは分かんねえよ。ただ受験勉強で星の名前を覚えるなんてやつにはさ。

女子 あら。でも彼は彼で立派だと思うわ。自分のしていることに目標見つけているんですもの。いい大学に入ることだって、本人がそれを目標としているなら大したものよ。ただボーっと星を見て、時間つぶすよりはいいと思うけどな。

男子 へえー、やけに小西の肩を持つじゃねえか。そういうお前は、何に目的を見つけて、セーター編んだり、料理を作ったりするんだよ。おれには、そんなことの中にも目的があるなんて考えられねえな。

女子 そんなことないわよ。セーター一つ仕上げれば、何かを作り出す喜びが分かって、これが目的になるわ。料理だって、人に食べてもらって喜ばれれば、これだって目的になるんじゃないの？

男子 それはそうだけどさ。おい雅志、なんとか言えよ。おれたちの星が女の編み物と一緒にされてるんだぜ。

雅志 うん…。でも僕は優ちゃんの言ってること、間違っていないような気がするよ。だ

って、星を見つけて、位置を調べたって、それは本に書いてあることの確認にしか過ぎないし、土星の輪を実際に自分の目で見たって、それはもう何度も天体写真で見たことのあるものだし…。確かに、僕のやっていることってのには、目的なんてないかもしれない。

ナレーション その時、雅志の心の中には、急に、今まで自分がとてもむなしいことをしてきたような気がしたのです。そしてその夜――。

雅志(モノローグ) あーあ、確かに星空はきれいだし、未知へのあこがれみたいなものはある。でも結局は未知のままなんだよな。自分の手で調べることなんてできるわけなし…。そしたら、やっぱり優子ちゃんが言ってるとおり、目的のないむなしいことを僕はやってるんだよな…。あーあ。

村越まゆみ (オフ)ごめんください。

雅志の母 はい。あら、まゆみちゃん、いらっしやい。

まゆみ こんばんは。これ、お母さんがおばちゃんに頼まれてた物ですって。

母 あ、わざわざありがとう。さ、上がってちょうだいよ。(2階に)雅志、雅志！ まゆみちゃんよ。ちょっと降りてらっしやいよ。

雅志 うーん、ちょっと今、行けないよ。手が離せないんだ。(モノローグ)チェ、またうるさいのが来た。どうせ用事なんかないんだから、いいや。

(効果音) (ノック音)

まゆみ まゆみですけど、入ってもいい？

雅志 え？ あ、どうぞ。

まゆみ こんばんは。おばさんが「どうせ星を見てるんでしょ」って言うから、わたしにも見せてもらおうと思って。少し邪魔していいかな。

雅志 うん。でも、なんか、星への熱も少し冷め気味なんだよ。

まゆみ え、どうして？

雅志 うーん、なんて言うのかな。いくら星を観察したって、手の届かない所だし、結局分からないことだらけだろ。そんなことに、目的もなくお金や時間かけるのなんて、バカらしくなっちゃったんだ。

まゆみ ふーん、そうなの。

雅志 まゆみちゃんは、何を目的にしてスキーやサーフィンなんてやるの？

まゆみ 目的？ うーん、スポーツ自体には別に目的なんてないわ。でもね、スキーにしろサーフィンにしろ、自然の中に自分を置くスポーツでしょ。そうすると、山とか雪とか海とかに、自分がじかに接することで、頭の中の自然、つまり“この木はなんとかという名前”とか、“この山は、高さは何メートル”とかじゃなくて、自然の本当のすばらしさが分かるのよ。なんて言うのかな、なんとも言えない感動がわいてくるの。それは多分、この自然をつくられた神様のすばらしさ、偉大さを肌で感じるからだと思うわ。あえて“目的”と言ったら、そんなところか

な。

雅志 神かぁ。実は僕も星を見て、ふっと、何か大きな力、…うーん、神って言えるのか分からないけど、人間には分からない大きな力があるんじゃないかって感じることはあるんだ。

まゆみ ほんと？ わぁ感激だ。「雅志君が星見ながら神様のこと考えてくれないかな」って、ひそかに祈ってたの、わたし。ねえ、聖書の中の創造論って知ってる？

雅志 聖書の、創造論？ だって、聖書ってのは倫理道德だろ？

まゆみ もちろんそれも書いてあるわよ。神様の救いのことね。でも、わたしたちの信じる神様っていうのは、人間だけでなく、自然も、宇宙も、この世界のすべてのつくり主でしょ。その神様の書かれた聖書ですもの、書いてあるわよ、バッチリ。ねえ、今度、読んでみる？

ナレーション 雅志は、思わず釣り込まれるようにうなずいたのです。その聖書から、神の“創造の目的”が分かったら、自分の宇宙はまた新しく広がるかもしれないと思いつつ――。

<完>